

ドナルド・キーン先生と漢字・ローマ字



1. はじめに—ドナルド・キーン先生の日本語学習

ドナルド・キーン先生（1922年生まれ）は不世出の日本文学の泰斗である。『Anthology of Japanese Literature』（『日本文学選集・古典篇』）と『Modern Japanese Literature : an anthology』（『日本文学選集・近代篇』）は日本文学の英訳アンソロジーのロングセラーだが、キーン先生は前者を1955年、実際に33歳の年に、続いて後者を翌1956年に出版した。古今の名著選定のバランスの良さは出色である。その後、1976年に『日本文学史』（後に『日本文学の歴史』と改題）の刊行を始め、1997年、75歳で全18巻を完成した。古代から現代までのあらゆる種類の日本文学を縦横に読み尽くして編まれた偉業である。「百代の過客」の上下巻（1984、1988）では、古今の日記を丹念に翻んでいる。その後、先生は『明治天皇』（2001）、『渡辺華山』（2007）、『正岡子規』（2012）と評伝の大著を次々と刊行、92歳の現在は『石川啄木』を執筆中である。先生が読まれた日本語の作品数は数千に及ぶものと思われる。

先生が愛してやまない日本文学の言語たる日本語の基礎を、先生は19歳で入学した海軍日本語学校での11か月間で築いた。その詳細を知りたくて、わたしは2012年2月から数回にわたり先生のもとにうかがつたのだ。先生は趣旨を深くご理解くださって、心を傾けて応じてくださった。そして、日本語や日本文学への溢れるような思いを存分に語ってくださいました。その成果は2014年9月、「ドナルド・キーン わたしの日本語修行」と

題し、先生とわたしの共著として白水社より刊行された。
『ことばと文字』に寄せる本稿では、この本に収めきれなかった内容も含めて、先生の漢字、ローマ字、そして文学のことばへの思いをお伝えしたいと思う。

2. 漢字

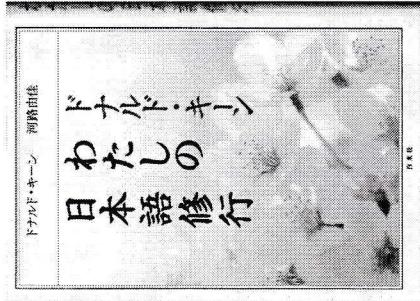
「もし日本語がローマ字で書く言語だったら、わたしがこれほど興味をもつことなくなかったと思う。（p.243）」とキーン先生は書いている。先生は日本語を学ぶ前から中国語として漢字を学んでいた。

漢字はおもしろかった。わたしにとって漢字を覚えることは、子どもたちに切手を集めていたのと同じような感覚で、なるべく珍しい切手を集めようとするように、複雑な漢字を覚えるのも苦にはならなかった。慣れてくると感動は薄れるが、新しい漢字に初めて出会うのは非常な楽しみであった。（p.243）

ある。先生は当時覚えた部首の名称や配列を今も鮮やかに覚えている。それほど字典に親しみ、ひたすら覚えることをされたのだ。漢字についてよくその知識を身に着けた先生は、同じ漢字を用いる言語として日本語に関心を持ったのだった。

キーン先生は戦後のアメリカにおける日本語教育に関して、入門時にローマ字で示し、ひととおり学んだ後に漢字を導入するという方法が採用された時期があることにについて批判的である。学習者が少し会話を習得したところで漢字学習が始まると、習得したはずの会話の力が落ちることがまたたとう。「漢字は最初から勉強するのがよい」というのは先生の搖るぎない信念である。その意味でも、海軍日本語学校で教科書として使った長沼直元の『標準日本語讀本』は非常によかったですと高く評価している。

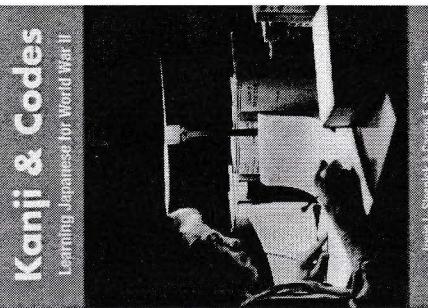
海軍日本語学校では毎週試験があつたが、その中に書き取りが含まれ、教師の言うことばを漢字で書くことが課された。



書き取りは速く書かなければならぬのです。速く書く。「會」という字。今の「会」と違うでしょ。書くのに時間がかかりますが、それを書いてるときに、もう次のことをぼの指示が出る。わあわあ(笑)。大変でしたよ。当時は略字はなかったので、黒板前に立つて先生が「タイワン」というと、わたしたちは「臺灣」と書かなければならぬのです。(中略)そして臺灣の半分を書いたところで、先生は次の「臺^{タウ}灣^{ベイ}」を書けといいます。あるいは「鹽^{しお}」。そういうふうにわたしたちは一生懸命、書いて書いて書きました。先生は悪魔のように次々に書けと言います。でもそうやって、わたしたちは書いて、漢字を覚えたのです。見るだけでは完全には覚えられません。大変でしたが、そのおかげで、わたしたちは海軍の日本語学校を卒業したときに、現代の日本語であれば大抵のものは読みたし、文語体も行書も一通りわかるようになっていました。(p.40)

ということである。卒業後、戦場に赴いたキーン先生の仕事は日本兵の書いた手書きの文書や日記を読み解くことであった。手書きの文字を読み解くのには行書の知識が役立った。

同じ時期の海軍日本語学校での日本語教育を扱った本 (Irwin. L. Slesnick & Carol. E. Slesnick (2006) [Kanji & Codes (漢字と暗号)]) では、「漢字」が書名に使われている。彼らにとって「漢字」を読むことがいかに中心的な課題であったかがわかる。表紙の写真は当時の学習風景で、生徒と見られる一青年が、正面に上田万年の「大字典」を置き、左前方に長沼直兄『標準日本語讀本』の複製本を置いてノートに縦書きの日本語を書いている。上川の漢字字典は海軍日本語学校入学時に全員に配られたそらである。



の蔵む漢詩の作品を評価しているのが印象的だが、日本の古典にはより一層、漢詩の影響が濃厚である。漢詩・漢文を自由に読める先生の力が、先生の日本文学研究に奥行きを与えることは間違いない。

3. ローマ字

一方、音楽好きの先生が日本語の音の響きを愛づることもまた、ひとかたならない。先生はローマ字で日本語を学ぶことはしなかったというが、「標準日本語讀本 卷一」の海軍日本語学校による複製本には、原本には存在しない仮名とローマ字の対照表が付されている。先生が日本語の音をローマ字で記す方法を知らないわけもなく、それどころか、頻繁にあるいは常に音の響きをローマ字で感じている様子も見受けられるのである。

キーン先生は正岡子規の「柿食へば鐘がなるなり法隆寺」について、子規が作品の着想を東大寺で得たにもかかわらず「法隆寺」としたことについてオ段ウ段の長音の連続が鐘の響きを思わせるからだと解説する。芭蕉の「静けさや岩にしみいる蟬の声」では、「岩にし・み・い・・・・」とイ段が続くところが蟬の声を思わせるし、同じく芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」は、「つわものども」の「ものども」、「ゆめのあと」の「と」のオ音がもの悲しさを伝えている。そう語る時、先生は渋え冴えと澄み渡るような表情をする。先生には何かがありありと見えているようだ。

この母音の効果は、ローマ字で書くとよくわかるのです。でも一般に日本人はそれほど発音に注意をしないようです。「名神高速道路」とか「東名高速道路」というとき、「迷信」や「透明」と発音が同じだということにも日本人はあまり気づかずにいるようです。(pp.201-202)

先生には、漢語の同音異義語についての一般日本人の無頓着ぶりが不思議に思えるようである。「漢字を思い浮かべるから (p.202)」だろうと推測された。ということは、先生は漢字を思い浮かべると同時にローマ字をも思い浮かべ、母音の響きを常に視覚的にも感じていることになる。もっとも先生の母語が英語であることを考えると、これはむしろ自然である。

先生による「静けさや・」の翻訳は次のとおりである。

How still it is here—
Stinging into the stones
The locusts' trill.

芭蕉の原文のイ段の音に通う母音の「i」を響かせるばかりか、still, stinging, stones, locusts と、「st」の音を繰り返し使うことによって静けさの中の蝉の声を感じさせること、見事といふほかない。

4. 文学のことば

日本文学を視覚的にも味わい尽くし、先生はそれを英語に翻訳してきた。先生に教えを受けた人々は世界中で、日本文学を英語のみならずさまざまな言語に翻訳している。

その一人で正岡子規や謝野晶子の研究者であるジャニーン・バイチャンさんはによると、キン先生の翻訳についての教えは「逐語的でかつ美しい」とだといふ。できるだけ原文に忠実に正確に、その美しささえ英語で写し取るような翻訳を、先生は学生たちに促したそうである。先生は、「人間の作ったもので、最も長く残るのは文学のことばです」とおっしゃった。そう語る時先生の脳裏には『源氏物語』など日本の古典が浮かんでいるようと思われる。「1000年も前のもので今も生きて残っているものはほかにあるでしょうか」と先生が力のこもった目でぐっとわたしを見た。言い過ぎを怖れずに言えば、先生は日常会話にはさほど関心がない。古代ギリシア語を勉強したときの喜びは、最初から文学のことばを学んだことがつたと語られたのも印象に残っている。外国语学習は好きだが最初のうち「非常につまらないこと」、たとえば「あなたのおばさんへのベンはどうありますか」というような文で練習しなければならないのは苦痛だと、ユーモアをまじえて話された。先生の学んだ長沼直兄の読本では様々な文体が扱われ、会話の文にも敬語もあれば友達ことばも出てくるが、先生は友だちことばは

使ったことがないという。もっと碎けた日本語を使つたらもうと親しくなるのに、よく言われたけれども使わなかつた。子どものときから使つていゐわけではないのに、そうした言葉を無理に使ふと、「ほんとの自分ではない、偽物だ」という気がするのだといふ。「俺」という一人称も、カジュアルな話し言葉も使つたことがない。「わたしは英語でも、いわゆる流行語とか乱暴なことばは使いません。嫌いなのです。なるべく、上品な質の高い英語を話したいと思います」(p.88)とその志を語つた。時間をかけて選ばれた文学のことばこそが価値あることばで、時代を超えて人の心を打つのだと、先生はその文学観を込めて語られたのだった。

さて、僭越ながら後日談をひとつご紹介することをお許しいただきたい。わたしは日本語教育に従事して四半世紀になるが、それより少し長く短歌を作つてゐる。2014年秋に先生とご一緒の本を作り終えたわたしは、以前にまして先生への敬意を募らせ、今年(2015年)の正月に「ドナルド・キーン先生」と題した十首連作を所属の短歌誌に寄せたのである。

にんげんは小さし　されど果てしなき宇宙のごとき人ここにあり
小柄なる先生あまりの大きさに近づきすぎては吹き飛ばさる
「京にても京なつかし」と先生が口づさむ　そばにゐてもなつかし
その本があつたはずだと先生は九十二歳の身を本棚へ
天の恵みの子として生まれ日本語にふと出会ひたるキーン青年
日本語とキーン青年結びしへは海軍・第二次世界大戦
お話を史料がかくも一致する天才にして誠実な人
装丁に桜のデザイン選びたる桜大樹のやうな先生
啄木論に勤む九十二歳なり　最後と思ったことはないと言ふ
明治天皇、渡辺翠山、正岡子規、石川啄木　次は誰なる
そうして、これを先生にお送りした。すると、あろうことか、すぐに先生から手書きのおはがき(2015年1月15日付)が届いたのである。太字の万年筆で「(例の本の)書評は大変好意的ですが、一番感激したのは河路さんの短歌です。」とあった。

キーン先生は「(正岡)子規がいなければ、俳句や短歌は漢詩と同じ運命をたどっていたかもしれない。現代の俳人と歌人は彼に感謝すべきです」と言つたことがある。未席ながら短歌に携わる者として心に深く刻んだひとことであつた。それにしても、私がこれまで口頭で、また散文で相当量の日本語を発するのを日々と処理（！）してこられた先生が、短歌に「感激」してくれたことは。拙くとも文学のことばに先生は感応してくださったのだ。先生のことばには裏表がない。この感動は、もはやことばにもならない。

5. おわりに——外国语教育・外国语学習が湛える希望について

この本を作るに際して、先生のお話を原稿にしたのはわたしである。原稿を先生に確認していただいたが、先生は迅速に目を通して丁寧に赤ペンで書き込みをして返して返してくださった。先生が日本語を読む速さが尋常でないことは分かっていたが、そのことが実感される体験だった。

わたしが日本語教育を仕事に選んだことには、キーン先生の存在が影響している。青年になってから学校で学んだ日本語で、先生がこれほどどの仕事をされているのを知って、言語教育の可能性に夢を抱いた。日本語を学ぶことなしに日本文学者ドナルド・キーンは存在し得なかつた。そして、キーン先生は「戦争がなかつたら日本語に出あうことはない」というのである。外国语学習にはこの手の不思議がときどきある。

この本の解説を私は次の一文で結んだ。

「このような事実を確認するとき、わたしたちは言語学習、言語教育というものが時代を超える希望を湛えた當みであることを、信じることができます。」生涯の仕事として言語教育を選ぶことが出来て、良かったと思う。

（東京外国语大学教授・博士〈学術〉）

■参考文献■

ドナルド・キーン、河路由佳（2014）『ドナルド・キーン わたしの日本語修行』白水社